一刺千金梅の春卷之十二

江戸　爲永春水著

第廿三回

清水の月に雲もなく夏の夜の涼船に縁の橋員を逢初て語るを此方ハ園く二人の話を聞ホツト溜息をつく

涙の露ぬくむ袖に音へ七三郎ハ向ひ合ハ七ぎん分

更ハ三ツ　言ハ一ケ行ひるとゞ行ひるとゞ五八ぎんハ

ものゝ名せうまへ　七「ナア二ハ名ものゝナ名一

玉八ぢ　えんぐんそやべうまきしく　言ひ　ことへをの時へ　伶俐
でもかさ　しま　長屋にて　住居ナ　なりまへ　くまへヲヤアア　其
なむ　なりまを　お言ひでも　お前　まへ男の　性を　左様
様子　お言ひでも　ねがつ　つまらき　お玉さんへ　ヒぐく　ぐんべ　ぶ　ヨ小菊　年ごろ　さきどの
ろり　留理の　文句を　国度毎ゐ　きくんび　お玉さんへ　いのうり　書解ぐろ　ろんと
野　男へと　脇へ　おれ　ギツクリと　あさ　當ろ　おり　ぢぐろ　ろうまへ　妹の　ろを
身ゐ　引　のきうけ　信切ゐ　えせろ　信切ゐ　しを　お　呉の　くれ　お呉ぐ　稽く　おん　ー
のを　義理　ぎりを　ぢろ　言ひ　ひ　ゐ　ぢろ　ぢ　ぢ　ぢ

光秀が腹をおさえの病人に成りうろうろと言うさうおあんの
き
気が障りも仕まをつゞおれ物思
うろうろ
加減
成ると成ると成ると成ると居ると成ると
玉八
脳のおあんまんおあんが
悪しく言へばまた家
見人女の悪しきを知らうと勘うろうろして
病しひあづかるおあんまんがおあんが
ようへ腹計ふおあ御の
乃を茶屋ふしておあんの中へ紙がマアスるの家
ぞど
和と おあんまんが見へまるのゞ面目な

ふるそ思ひきえぬと思ふ人ト
ぐら
ふる雨を流るる涙なくうき
一ふる
限りと言葉を七言葉も同てきき
きき
とへ給へ分身が面目なくてこそ
ぐんぐん
さ
ぐれ
ぐ
ぐ
ぐ

ゐのが悪ひろうゑ蓋開くとさのぐ雑人でも呉れ
あめう　高「アレサ　ゆぐざるへ私が内振ふふ苦男
ゆ言をひふのふ　笠引もお新振ふへ取上ろひで女しん
ぢ程の冒ろりく言ひ川て女を嬢ーぐろ世ろ長べ源と異
ぢ在どやア悔しい初人分根で古まぢお玉さん不知
ぢ言ふ居ろひろう言ふさるて面回見を美ふよろ私の
方ろお玉さん言出しん袖ろて長ふとおろ分ふ
七八五十二コ言く大長るろも言ひ玉八ふ根ろ

言ひて彩りの支でなくなりたきと思ひ
ものの支でなくなりたきと思ひ
ものの支でなくなりたきと思ひ
知恩院様へ参らせ給へ方が参らせ
方が参らせ給へ方が参らせ
安靖とて買ふおぼしめしの方へ七へ
ト
参らせ給へ方が参らせ給へ方が
高ぶりて世話ふ離別して佐まひ
高ぶりて世話ふ離別して佐まひ
高ぶりて世話ふ離別して佐まひ

ふあ「ヲ」キ　お玉　義太夫　義理　義理の義理の義理を言うて腹を
かと豆　ぶヨ　行程　妹が　お前　お前の世話になるようとしてもこの
私の　かか　お前　義を　極く　思召　月の八王八さんと
の人　お肉　義さんの　在るのを　言葉　の　の義でも　退れてゐる
るを　こつ　関ル　佐藤　ちがひ　ちがひ　ちがひ　ちがひ　元　ちとの
さんが　ちがひ　義しいと　思ふ　気中へ　お前　義が　可憐ず　てお呉の
義　義ル　涙　悔　を　きる　穏ずと　知ずから
お玉　さんへの義理の　義理を　仕出　本のごとく　お前の義

ゆくゆく
御ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
大きに
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの
ぞうしく覚悟を思ひ定め暇をもらひ
ようへ十ぢう逢ひたくも捨てがたき
さうこうの取締は甚兵衛を
頼く立ちたし碁代りをへ分の稼
をもらひ
さろ
家しに
出した
てんなの

さるべき人の男を賜へ人 信切い義理の中にて和合すべきなれど
ものゝ恩愛の情 言葉 まくるまゝ不覚敬まれ
庭の草の露 西へ入る日のくれ方 聴くし七寸余合
顔へ涙 閨へしんけれ 折らう来るる渋の帯 出て 殺す門
口を押へ 家内をわるまへしまうぐらう 武へハイ 出るへト言へ
見た二人へ 徳寿きうく 七へ今お出 長成まう 渋へ平二七二帯
さん 出るゝ中うゝ 種彦こと正作さんの方女 林合まうこだのでも
アヲ出 きんぐ一日 途中ゝ連出 七寸余きろそ 安 限

お柳の[illegible]が[illegible]
[illegible]
言ふまでもなく[illegible]再度[illegible]
どもは[illegible]さんへ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
お柳の[illegible]
お柳を[illegible]
方へ[illegible]

[illegible]べお茶と[illegible]ぎんの方で
[illegible]
[illegible]の方へ掛合を[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]れ
[illegible]
お[illegible]さんが成て居る
[illegible]
[illegible]お[illegible]方の
[illegible]
[illegible]の正作さんの
[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]の
[illegible]の
[illegible]を[illegible]
[illegible]

吉兵衛　近所で七さんの噂を聞きやり玉八ぎんと人
の子本妻で条右さへ妻ぐらの情女ざとろの女房
和府町で指を折りて人先へうぐそ人らまる美麗の女二
人　三女も楽しんで居るんだん　お柳の方の養育
金を辨へて出さとくらへ行ぐもぎらるやとと人参さんも
ぐ世るで情人ぐと知りて居るまる七さんの
ぐ一働きぐ繁盛
見ト四隣へ聞ゆる格合ぐ居る所へ帰りぐ

主人が家内の形をを案内かくれば七条
吉人他ハ雪うるく又を怖れ多へ
ちうちう無頼をお聖人甚科金をきるのへ国人
若松へ様通ぐ人ぐと他国の思ひ
ぐ人ぐ
私と七さんと
言て出ると波へ
さんな此方中お柳の一件を久しく此玉地ハ居て
居て何も面も国へ居て去月も七さんの又ち
此の客を不貴庵ぐやア多ひり然ども其客ハ七さんの

命を捨てゝ敵やうを生まんと
なりゝ潮白らーく強情をいへべ
ばまぎ澄古ぶひらく
甚兵衛とて老も角もお柳の逗留
なれば帰まるのゝ
四郎右衛門裏口の隙をゆき入来る来て
波九郎の側へ行
来〳〵先刻より門口にて居る
お若へ何処へ行ぬ顔
のごとく 波〳〵お若へ行ぬ今時分横合より出
だろくしいと見甚兵衛

ぎまふ　お祈の禊合をきるゑんだと　伊藤を言ふ　来やア
ぐつと　のぐ手。コレ　早く　解らまと　ふと　舞さうぞ。　ふてん
宮　　　

見送りして茶屋の家へ崩し上げ明地ふ為て
仕まひやしと即時に三味線草ぶ出るのぐア。アハハ
ト言うまて恵者 波九郎も南無三宝早合ぶ
ちうまるるとき踏きるぐ猫屋 惜しの言葉を
言ひちらして居る 其所へ表の方ふ人音一杯
ど市中
ア戸明て入 お玉 手を拍子ぞろくと乗入る
三三人ぶ 波九郎を引 横へ横ま不言ふ連れけり
ものの
ア戸ハ 松ま平 石松ふ 怕りまとらと 家ア

ちうろうへ　主へ仰せられしこのごとくうまへ　家へ入て彼奴へ
波丸の事と聞て是まで種々の悪巧ばかりをなすこのごとく丈
で歳月の恨不遂て初まてのこのごとく　主へ申やう　然る人解毛嫁ごをへ
歳月の恨を遂て初まてのこのごとく　主へ申やう　然る人解毛嫁ごをへ
和方の者ども見物　憂まで　帰りて直ちに家内ごとく
いかゝ家内ごとく　もゝぐまるゝ　ケイ改をした屋敷
高麗彩色がまるゝ　ケイ改をした屋敷　ちう来たる丈　さんが事で
ちゝ礼　ちゝ
ちゝ礼　ちゝ
ちゝ礼　ちゝ

七三郎も胸トツキリ彼陸九郎ガ高聲不言を
あたらさぎ
玉ハグう宮めて圓てひるるあんと思へバ心を脳しけるど
まぎ
知らぬ顔不絵らーー七へ玉へアくノウ玉ナやくくくう
ありのグ止不ありくう鉢梅不早く駆らまへ
ぢんぢん
奈さん出番の庇へ止不あるくのうへ明日不ありまり
それ　さいき　ふ　ぢ　ぢ　それ　ぢ
ふふ支不先刻ちようひと贅沢屋へ知ふ支くう赤ふ柳の
ちらぢ　ちいさ　まいぎ
ぢそチョットふ人寄まくへ玉へ鉢ふ人米ふ人毎度
ちいさ　ちいさ　ちいさ　ちいさ　ちいさ　ちいさ　ちいさ　ちいさ
大ぢふふ世話さふ反で七ホン二米ふ変で長

さて、うちとも陰九郎
殿へまづ来て、お暇でひまをつけまして鬼若松の
正のうちで、人来へ実正サン若松へ嘉兵さん
那の坐しを表へ兎も角も御柳さんの身の成正作
さんの方へ返さを松と思ひうふ嘉兵さん不金を借へ
あるまつ
鬼若松へ養育金を半分金を出すと先
きに
刈方言ふ通り鬼若松へ住まつて御柳さんへ
実親の正作といい者が引取つてつまりの證文を居る

根へ出しても角も減ざるいと豆を麥にく圓さう直ホ
尋ねて行くと正作さんホ遊べ圓さう実へお柳へ玉八さんと
いへ女房の方ウ姉のお蔡の方ホ居ませうが私ホ引取さ
つもりふ住べ者もさんと言ふ者やるウ鈴ふ鈴ふ言ふ
七三郎さんの所へ知せる早ぐ早ひふ鈴ふ言て出ながら
お柳へ何根ーーーー苦勞ホハ多りイまたが此根ホ年ク後て
いくぢ地ガ多くふりまさふ何も角も思へ根ホ出ホ
意気地ガ多くふりまさふ
せねと涙を落へ言ふ成ふお柳さんの居所も麥にく

ひときうに世人支うう

福さんの方の一件も相淡くくう姫一

ものぞ仏事お条くと内相淡を生成てよろしくお願くゆきあ

いひきうに

上言弦歳ゆうあるもうぐ お業ド、生歳ゆきあと請合へ来やくく

七八イッもんハ多私ガ役ゆきぐも不践落老へお呉生歳くのぐまいもえ

おれ

お稽の上言相もあひうと 宮不モウ 私ゆきア義えへあひうと

ゆ

男人ぐ姫一人ちぎるゆきへ男へよへ手ちくく七さんも私も赤

ちえ

相不弦顔甲逝文ぐあんぐひ

きき

宮不 安婚ゆきう相ゆきうへト互不 脱び 婚合ゆけ

第廿四回

再訂現在亀戸の草庵に人が時々戯れの根ふたらひん
浦々おしなべて人を改めさせ毎朝親へ孝行をつくべき
ぞえ
ぞえ
ぞえ

ゆゝしくへりくだりたまひて、
人品無し 自然と野暮ったく生得へ美麗なれども
陽の温順さに野暮らしく八重垣
お八重とて 當世若衆の洒落なる乙女の風
俗の好き 衣裳を着せて髪も流行の結ぶ
自然と人品賤しからぬ二人並べて
時へいづれを上と見立べき正しお八重を櫻の
花とたとへ人さへ嫌げ香の匂ひを深りといへん

お柳と梅とさん（てん）の後（あとさき）の家（うち）を風情（ぜい）

たりとのぶーお時（ときん）看物（みもの）て完（くわん）笑ひ（ゑ）きまりくく

かうさう

所両人さんなのぢう（どん）お柳（やなぎ）ぢ（じ）ぶ（ぶ）ぢ（じ）ぶ（ぶ）ぢ（じ）ぶ（ぶ

おあきさんの郷で可愛らしく所作しても
なる
叶ひ　まきんらう行きをんョ　りうりうアアア貴嬢まで其
おあきるを作て　私をおひどめ　まきんョ　六八五銭
でんきるまきん　実りでぎざる　まきん　西方で
そのうきを　卑しをるを　五六貫うの　繞をしたお仕　後ども
ぬぶ
初まきん　広両人多うり　娘　評判記とやくが出来
まきんョと西と東の大関でおぎる　まきんョそのお美人　蔵しん
宮　ひぐ　あま　ちがき　うく
古賴で在ぐらお八重さ多い　此お頭巾を召も　お夜を

着て居るとん助の情ひ申すべきうけ
ん物程おもしろき事
冠りて面白く成のとなり方がお
今は僧もお目かうけまして
お八重は祖父茶の宿屋の
お八重はその侍は冠り居て
坊さんの方が似合とぬヨ
長く成ても鳴田舞を
入りて成ろ虎
入りて成ろ虎
入りて成ろ虎

さて坂根の外れも　次へ〳〵と　出逢るは　若旦那
ゐまして。　この戦の　道中　お嬢様　成さのもぶぶるまで
せうトの　ひ　変　さうくれ　聞えねど　家内を　覗くと　人の居る
様子を　あるも　案じて　縁側の　障子を　あらのめ　壮年　這入
あそこ　　神明　　入来る　　足　来た　　腰を　屋敷
出逢　　戸を　　成　　雑人　　
次へ〳〵ハイ　　ハイ　　ハイ
ト　出逢　次へ〳〵　私へ　従来の　書者　ぶぶる　まして
若旦那が　此　庭の　外　多く　病　　雑義

ひとーまたんろう　なの幸　氏　嶽側の智を少しの名
きまり
氏成て下さいまし　根ふ　お願ひ中まし　きへヤく然で
氏成　まさしろう　途中の　作　病も　でへ　さぞお国　成
まさ　ご　ご　ご

ゆく此家へ伴ひ入る其病人へ知合なる者なれば則
あつかり此庵のお八重が知ふ墓ひまぐるる新川の土蜘蛛の
蜘蛛ふて隠居所ふ病ひを保養して居る福ちゃ
りまべ陸奥より遊見をしたりけるがお八重へ
びく物りー今夜ヨヤト言ふ矢出んとせしが遠慮しをお隠ふ
ひそうふ呼けべ呼ぶうをぞぞるまた久ト右
ま〻〳〵サアく出ても所遠慮入ませんマア
お出なさまー〻ヤレく出ぬ雑煮をどぞ

去ンぬる　ことし　一度持病をたゞし直ス　おぼつかなきうきさうマア
ゝ　ゝ　ゝ　

ひらく　お蔵ぐ　あらうまたくろう　出ようまたくろう　成　まさごん　クト
きーいぐ　ぎ　ぎ　ぎ

ぶらりと入て宮ゐ不ル男髪を乱し又ハ白ハ
丈ハ高く丈ハ低く手ハ
の言ふ通り福ゝ助の顔を後密見つめ居る男
げ毫ゆえ安ハ〳〵ヤアおゝ大ゝ成ま
よく〳〵考へ成ま〳〵ゆうゝと白ハ
ゝとゝ〳〵ト笑ひ入ま〳〵福ゝ助へ発ハ
やまひ病の養を願ゝ迚庵へ入ゞ
ところ保養ハ
ゞよとハ言ゝく暫時苦痛の体ハ

ちうまへの方へ来る人の姿を見て福助
出八言ふ お柳を片時も早く見まゝ次郎
言ふ人の知る一男を連て此庵の様子看
護婦りしが次郎者が俄に思ひ出て
虚病を発し一側近く寄たりるを幸と
露ども知らぬ顔して入来る宋左三郎も
玉八りとも出お柳に逢んと相談を為し此
程の所を世話なりる返礼の品あて種くの土産

物なども持参し先お時世は恨ぶし先達てより長く
やくそく
花柳ふりしお新の男女を流男女一同ふ礼を述べ
とき
お時ふも相変ふ会釈をしたまへアア雑人も多くて歳
ものしずかく遊人トのお時も福く助と倶ふ来り
おろか　ふたり
次郎吉ハ蒸て来て分易は少し勝負の服ら
さくらの　つゆ
三五郎　笑ひ　次郎
イヤ寄さん　次郎吉　三五
さんら孫ふ　新ぶ遊さノウ金作今月今月若旦
なん　郎の　新人と思ふ居るのぶ竹藤ぶ

つゞ
續いて　お金殿　りゑもん　言へべ　次郎　右衛門　言へ　家来　文　ゆゑ
こにて
ゆゑに
相ぐ三　ところの条　側近く　ところ及び寄れば　次郎　言へ　家の
よ　きたり　よねこゆ
ごく　こゝろ　なるべく　嘆くと　家来　言へ　嘆くべ　家ゑれへ

離波田の寺参り 笠取り 稲荷の人 参詣の 途中の 金
生のよ 恭世の 物乗めて 神と 佛と 引合せ ゆゑ 分る 意の路の
望 発うし りの ろ ぐ ぐ ぐ 感 ひ し 元来 座持 の 上 ぐ ら 者
ろ ぐ ぐ 石ふ 恥 う ー ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ 相 ぐ る 相 ふ 其 座 を 取 持 て 喋 べ
お 八 重 お 狩 福 ま 助 ゆ 次 郎 吉 お 陽 を 座 側 ふ 居 ぐ ら べ
七 三 郎 十 王 八 条 吉 を 危 ぐ ら ふ 重 で 相 ま ま ら ち 解 て 治 合
ち ち 相 ふ 面 白 可 笑 ど ち ち ち ち ち ち 来 ち 方 変 の 御 へ 参 ふ る 清 き
世 ふ 賞 月 ち め て 此 席 ち め て 此 席 ち 一 の 大 役 ち ら ん ち 分 て 七 三

部と乗合ゞ給ふ時の間あり談合一能へ出やうとする
ゆうりの御の家〳〵亀戸の茶屋よりうち持まれべられたるの
時酒盛とハうりふける
〳〵自分宅度
あるち後お御へ福ゝ勇の本妻とうりお八重ハ福〳〵
助と繋りを結び添き中とうり母親も兼知れぬ
親類頼ふ彼是諸判を乃らうるを祖孫一旦
啓次郎といふ丈躾の儀を結び主人夏
樽を立て尾とうしものゞ今更福ゝ勇の本妻と

ゐるゝへ福三郎ゑ勘左衛門さをゆゝゑ竹二郎ゑ貞ゐる所ゑ多ゝ
よて妻帯ゑ西柳さ本妻とーけるゞ西柳お八重と猫と
多ゝ暮しーく詰合一年の中ゑ一月ゝ二月のゝゝの外人
たゝゐれて住居ーるゐく大方へ京八重と同ゞ所ゑ住ーまゞ
ゑ七三郎へ妻ゞ 蜜の家家へ 帰参ーー玉八へ八条寺を 嫁妻と 賠償 賠ーく
安房とーー玉八へ八条寺を 嫁妻と 賠償 賠ーく
猫妻のゞくゞ土ゞるゐゞ只一度ゑ 説ゑーー新く
分れも 目出度 祝の〻ゝ夏ゝゝーゝゝ

嘉兆が酒妻の体をの
猶此外ふ杉坂の
席の奥女のうりんど龍修らぐる條ともあり且正直
正作ゞ身の治うり第弓備前と三國の稲荷の術
剣益霊験答る 説 花草紙ふ
中に若さとして登り志ちあへ要を摘んで早く
巻を作るのゝ

梅の春巻之十二了

麗漏先生 鹿永春水述

4000